

平成 23 年度 修士論文・卒業論文要旨

修士論文

七條めぐみ 愛知県立芸術大学大学院音楽研究科 (音楽学領域)

ゲオルク・ムッフアトの《音楽の花束》に見られる様式の混合

要旨

本論文は、ゲオルク・ムッフアト Georg Muffat (1653-1704) の管弦楽組曲集《音楽の花束 第 1 集》(1695) および《音楽の花束 第 2 集》(1698) を、さまざまな角度から分析することで、この曲集をバロック音楽における「混合様式」の先駆的な表れとして再評価することを目的としている。

ドイツのバロック音楽はしばしば、イタリア、フランスの音楽の要素を取り入れた「混合様式」という名で言い表される。この様式は、18 世紀半ばのゲオルク・フィリップ・テレマン Georg Philipp Telemann (1681-1767) やヨハン・セバスティアン・バッハ Johann Sebastian Bach (1685-1750) の音楽の代名詞となっていることが多く、彼らによってあらゆる音楽の要素が統合され、混合様式が完成したという見方が一般的となっている。

ドイツ・バロック音楽の組曲に関して言えば、小規模なオーケストラやアンサンブルのために書かれた管弦楽組曲には、フランスの劇場音楽からの影響を色濃く見せているものがある。17 世紀末期から 18 世紀初頭にかけては、このようなフランス風の管弦楽組曲が盛んに作曲され、それらがのちのバッハらの組曲を準備したと考えられている。しかしながら、これらの組曲はこれまであまり注目されることがなく、ドイツの管弦楽組曲においてフランス音楽の様式がどのように取り入れられていったのか、未だ不透明な部分が多く残されている。

そのような中で、ムッフアトの《音楽の花束》は、フランスのバレエ音楽の様式をドイツ語圏へ伝えた重要な曲集と見なされてきた。この曲集には、ラテン語、ドイツ語、イタリア語、フランス語によって書かれた長大な「序文」が

付けられ、作曲家の目指す音楽様式や、曲集の成立背景に関する記述が豊富に含まれている。このような「序文」の存在感と特殊性のために、ムッファトおよび《音楽の花束》は、同時代の管弦楽組曲の中で随一の知名度をもち、先行研究も充実している。しかしながら筆者は、《音楽の花束》がこれまでバレエ音楽の取り入れという側面でしか注目されていないことに疑問を感じていた。

こうしたことから、本論文は、《音楽の花束》を「序文」と楽曲、そして曲集の成立に関わる種々の要因から詳細に分析することで、この曲集を総合的に評価し直すことを目的とした。論文全体は3章から構成される。第1章では、《音楽の花束》をめぐる様々な背景を扱った。第1節ではムッファトの生涯と作品について概観するとともに、パッサウの文化的風土について触れ、ムッファトの国際的な経歴と、パッサウにおけるバレエの上演が、《音楽の花束》の成立に大きく寄与する要素であることを述べた。第2節では、17世紀後半から18世紀初頭にかけてドイツで作曲された管弦楽組曲の流れを追い、《音楽の花束》が、南ドイツ地域におけるフランス風の組曲の隆盛に則って表れた曲集であることに言及した。

第2章では、《音楽の花束》の「序文」を分析した。まず、第1節では「序文」を扱う先行研究を概観し、2001年のウィルソンの研究では、4ヶ国語で書かれた「序文」の言語間の差異に、十分に注意が払われていないことを指摘した。第2節、第3節では、《第1集》と《第2集》の「序文」を取り上げ、楽曲の様式と曲集成立の背景の観点から、「序文」におけるムッファトの意図を読み取った。その結果、《第1集》と《第2集》のどちらにおいても、バレエ音楽を取り入れるだけでなく各国の音楽様式を混合することが志向されており、中でも、《第1集》では様式の混合、《第2集》ではバレエの様式の紹介に重点が置かれていることが分かった。

第3章では、《音楽の花束》の楽曲を分析した。第1節では、ムッファトの管弦楽作品を包括的に扱ったシュタンプフルの研究を取り上げ、《音楽の花束》がバレエ音楽の取り入れという観点でしか捉えられていないことを指摘した。第2節では、《音楽の花束》の組曲の構成を、フランスのジャン・バティスト・リュリ Jean Baptiste Lully (1632-1687) のバレエ音楽と、ドイツの同時代の管弦楽組曲、そしてイタリアのソナタと比較した。第3節では、《音楽の花束》

に含まれる序曲、表題曲、バレエの書法をそれぞれ分析した。

楽曲分析の結果、組曲の構成においてはバレエ音楽の特徴が顕著に取り入れられている一方で、楽曲においてはムッファト独特の書法が見られることが分かった。ムッファトが「序文」の中でリュリの様式を推奨しているように、楽曲の構造やリズムの点ではリュリの書法がよく模倣されている。しかし、対位法的でより複雑な内声部の書法や、半音階進行を含む和声書法には、ムッファトの独自性が見られる。また、《音楽の花束》のバレエに関しては、ムッファトがイタリア風に作曲したバレットとの間で、旋律のリズムや装飾的な音型が共通している。こうしたことから、ムッファトは、リュリに代表されるフランスのバレエの様式を踏襲しながらも、その中に対位法的な書法やイタリア音楽らしい特徴を盛り込んでいると言える。

筆者は、このようなムッファトの書法は、バッハやテレマンに先立って様式を混合する手法の表れだと考える。今後は、《音楽の花束》と同時期に書かれた管弦楽組曲においても、混合様式の先駆的な書法が見られるのではないかという仮説に基づき、1700年前後のドイツにおけるフランス音楽の受容と混合様式の成立の詳細を明らかにしていく。